

## 註維摩經の羅什説について

橋 本 芳 契

維摩經が鳩摩羅什 Kumārajīva (A. D. 344—409) により漢訳され、『維摩詰所説經』三卷となつて世に出たのは後秦弘始八年 (A. D. 406)、五世紀当初である。併しそれ以前中国には既に維摩經が伝わつており、呉の支謙訳『仏説維摩詰經』(現存) はじめ数種の翻譯でその研究も進められ始めてはいたが、訳語の未熟訳文の晦渋さ等の理由からまだ十分な普及を見ないでいた。<sup>①</sup> 他方羅什ののち更に二百五十年にして唐の玄奘 (A. D. 600—654) が同じ維摩經 *Vimalakīrti-nirdeśa* につき新訳『説無垢稱經』六卷を成したが、その弟子窺基のこの新訳經に対する註疏『説無垢稱經疏』十二巻がある以外では、維摩經に対する中国乃至日本での研究者註釈者は共通して羅什訳を基底にしているのである。而も訳者羅什その人の原經に対する思想的見解をも優先収容した註維摩經(正確には『註維摩詰經』)のあつたことが、維摩經をその羅什訳本で普及させることの最大原因の一つとなつたと考えられる。<sup>②</sup> 然るに現行註維摩經(略して註維摩、以下これに従う)は十巻であ

り、「後秦僧肇撰」と標記し、初めに僧肇の經序を載せてから本文に入るのであるが、經録類を参照すると註維摩と称されるものは、必らずしも現形一式ではなかつたことが知られる。まず『出三藏記集』には三種の維摩經序を載せているのであり、そのうちの一つが現在の註維摩に収まつた僧肇のものなのである。<sup>③</sup> さらに本文に入つて現形註維摩は、(一)羅什説、(二)僧肇説、(三)竺道生説の順で一經全文を二四八八句にした一句一句について註釈しているが、当初から果してこの形のままであつたかには疑問がある。<sup>④</sup> 羅什門下三千の弟子中、関中の四哲もしくは四聖は僧叡、僧肇、道生、道融であるが、同じく『出三藏記集』に収まつた「鳩摩羅什伝」その他に参照するに、僧叡、道融もみなすぐれた仏教学者で、当然に僧肇、道生に劣らぬ維摩經理解者であつたことが察知される。<sup>⑤</sup> 然るにも拘らず、僧肇以外の者の名で註維摩が伝承され得なかつたのはその理由がどこにあるであろう。いま試みに經録をその成立順に追うていくと、『衆經目錄』巻六には、

(一)「維摩經注解」三卷、(羅什)、(二)「維摩詰經序」一卷(釈僧觀)を出し、『大唐内典録』卷十には、(三)「注維摩詰經」五卷、(四)「注維摩經」、(五)「抄維摩詰經」二二六卷等のあつたことを記し、また『燉煌本古逸經論章疏並古写経目録』には、(六)「注維摩經」以下多数の現存浄名経関中釈のことを登録している。このように羅什訳維摩はその成立当初以来、繰返し研究されてきたものであり、一方ではまた「維摩變」としての普及やその民衆的感化のあつたことが知られて、凡てそれらの基本となつた『維摩詰所説經』の思想的宗教的もしくは文化的影響の極めて大きいことが分かる。一方、上掲『出三藏記集』所収「鳩摩羅什伝」には羅什の著作としても(高麗本)『実相論』二卷のあつただけを記し、註維摩のことは出ていなかったのに、宋元明三本では「並びに注維摩」としてこれを追加記入している。これなども、註維摩が維摩經の理解と普及に不可欠になつてきた歴史的社会的事情を反映したものと解してよい。

次に注意したいのは、註維摩に「別本」の名で羅什以前の古訳維摩参照のあつたことが示され、他方「梵本」の名で直接同経のサンスクリット原本の字句を羅什が指摘したことの表示が見えることである。而も「梵本」指摘は必ず羅什説の後段においてであるに反し、「別本」の表示は、僧肇説の後段で、特にその場合に限り逆転して同一経句に対する註解

の順は羅什説が僧肇説のあとであることである。羅什が彼以前の訳語訳本、従つて翻訳者を尊重した証拠と言えまいか。なお「別本」「梵本」両者が一箇所に併出するのは五回で、うち四回までが仏国品(他の一回は觀衆生品)であつたのは、同品教理の高き若しくは難解さを示したのである。ついで乍ら「別本」だけとしては十八回、同じく「梵本」だけとしては十九回、以上累計四十六回となる。併せて僧肇の維摩經漢訳業における殊勲を理解すべきであつたのであろう。

註維摩本文における羅什説は、(一)維摩經全体を羅什がどう理解していたか、いわゆる羅什の維摩經観と、(二)羅什所説に終始一貫して見られる思想的視点、もしくはその立場つまり羅什の仏教的立場との二つが特にその注目すべきこととなると考えられる。まず維摩經観について言うと、次の如く一経を前後に「浄国の会」と「問疾の会」との二つにして見ている。それぞれのちに諸家が「菴羅樹会」および「方丈会」としたものであるが、「浄国会」(浄国の集ともいう)や「問疾会」の見方や捉え方はより多く教理内容の實際に即していると言える。まず維摩について述べるのであるが、この人が「浄国」の大会に不参加であつたことが「問疾」の会を起させた所以であり、そこに彼の大方便がありその所説が一経の主内容なので彼の名を出だして経題にしたものと説明する。三段の順序があるであろう。

〔經〕 維摩詰所説。

〔註〕 什曰、(一)維摩詰、秦言淨名、即五百童子之一也。從三妙喜國來遊此境。所庇既周、將還本土、欲顯其淳德、以沢群生。顯其述悟、時、要必有由。故命同志、誦レ仏、而独不行。独不行則知其疾也。何以知之、同志五百、共遵大道、至於進德修善、動靜必俱。(二)今淨國之會、業之大者、而不同舉、明三其有疾。有疾故有三問疾之會。問疾之會、由淨國之集、淨國之集由淨名、方便然則此經始終所由良有在也。(三)若自説而觀、則衆聖齊功、自本而尋、則功由淨名。原三其所由故、曰維摩詰所説也。

と。続いて、經の亦名についても次の如く加註する。

〔經〕 一名三不思議解脱。

〔註〕 什曰、(一)亦名三昧、亦名神足。或令脩短改度、或巨細相容、變化隨意、於法自在、解脱無礙。故名三解脱。(二)能者能、然物不知三所以故、曰三不思議。(三)亦云、法身大士念即隨レ応、不下入禪定、然能上也。心得自在、不為不能所縛、故曰三解脱也。若直明三法空、則乖於常習、無以取信。故現物隨心變、明三物無三定性。物無三定性、則其性虚矣。菩薩得三其無定、故、令三物、隨三心轉。則不思議、乃空之明証。將顯三理宗故、以為三經之標一也。

と。即ち(一)は解脱 vimokṣa についてであり、(二)は不思議(不思議) acintya に ついてである。このように羅什が維摩經を一方では維摩詰という「人」中心に見ていき、他方では不思議

議解脱という「法」本位に見ようとしたその經観は、こののちながく諸家の維摩經註釈の基本となつたもので、その思想的意義は大きい。

続いて羅什説に一貫して見られる思想的立場である。これは「実相」の一語で尽くされたものと見てよからう。即ち羅什は例えば弟子品第三中、第六の迦旃延 Mahakātyāyana の段についてその「実相法を説く」の經句に深く着意して次のごとく述べている。

〔經〕 時維摩詰來謂我言、唯迦旃延、無下、以三生滅、心行、說中、実相法。

〔註〕 什曰、若無三生滅、則無三行处。無三行处、乃至実相一也。因下其以三生滅、為三実故、譏言レ無下、以三生滅、說中、実相法、通非、二下五句一也。

以下その五句を列挙してみよう。

〔經〕 迦旃延、諸法畢竟不生不滅。是无常義。……(1)無常の義(註) 什曰、凡說空、則先說無常。無常則空之初門。初門、則謂之無常、畢竟、則謂之空。旨趣雖同、而以三精麁、為三淺深、三者也。何以言レ之、說三無常、則云三念念不住。不住、則以有三繫住、雖去三其久住、而未レ明三無住。是鹿無常耳。未造其極也。今此一念、若令三繫住、則後亦三應住。若今住後住、則始終無變。始終無變、拋三事、則不三然。以三住時、不三住、所以之滅。住、即不住、乃真無常也。本以住為有、今無住、無有、無有、則畢竟空。畢竟空即無常之妙旨也。故曰畢竟空是无常義。迦旃延

未<sup>レ</sup>足<sup>ル</sup>而<sup>シテ</sup>謂<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>極<sup>メ</sup>者<sup>、</sup> 自<sup>ラ</sup>招<sup>キ</sup>妄<sup>計</sup>之<sup>ヲ</sup>議<sup>ス</sup>一<sup>也</sup>。

無常は空の初門で、畢竟空こそ真空である。畢竟空なのが無常の妙旨である。無常は畢竟空であるとする。

〔經〕 五受陰洞達<sup>セ</sup>空<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>所<sup>レ</sup>起<sup>リ</sup>。是<sup>レ</sup>苦<sup>ニ</sup>義<sup>ナリ</sup>。……(2)苦の義

〔註〕 什曰、無常壞法、所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>苦<sup>ナ</sup>也。若<sup>シ</sup>無<sup>常</sup>麁<sup>ナレ</sup>則<sup>チ</sup>壞<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>亦<sup>ハ</sup>麁<sup>ナリ</sup>。壞<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>亦<sup>ハ</sup>麁<sup>ナレ</sup>則<sup>チ</sup>非<sup>ズ</sup>苦<sup>ニ</sup>極<sup>メ</sup>也。今<sup>ニ</sup>妙<sup>無</sup>常<sup>、</sup>則<sup>チ</sup>無<sup>ク</sup>法<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>壞<sup>。無<sup>ク</sup>法<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>壞<sup>則<sup>チ</sup>法<sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>壞<sup>、</sup>苦<sup>之</sup>甚<sup>ク</sup>也。法<sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>、</sup>空<sup>之</sup>至<sup>ル</sup>也。自<sup>ラ</sup>無<sup>ク</sup>而<sup>シテ</sup>觀<sup>、</sup>則<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>壞<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>苦<sup>。自<sup>ラ</sup>有<sup>ク</sup>而<sup>シテ</sup>散<sup>、</sup>苦<sup>義</sup>所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>生<sup>ズ</sup>也。</sup></sup></sup></sup></sup>

第二に無常は壞の法で、したがってそこから苦が生ずる。

いま深妙の無常であるから物として壊れないものはない、物として壊れないものがないとすると、苦の甚だしいもの、物の不可得は空の至極であるとする。

〔經〕 諸法究竟<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>所<sup>レ</sup>有<sup>、</sup>是<sup>レ</sup>空<sup>ニ</sup>義<sup>ナリ</sup>。……(3)空の義

〔註〕 什曰、本言<sup>ク</sup>空<sup>、</sup>欲<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>遣<sup>ラ</sup>有<sup>。非<sup>ズ</sup>有<sup>去<sup>、</sup>而<sup>シテ</sup>存<sup>。空<sup>、</sup>若<sup>シ</sup>有<sup>去<sup>、</sup>存<sup>、</sup>非<sup>ズ</sup>空<sup>之</sup>謂<sup>也</sup>。二法俱<sup>ニ</sup>尽<sup>、</sup>乃<sup>チ</sup>空<sup>ニ</sup>義<sup>ナリ</sup>也。</sup></sup></sup></sup>

第三に本来、空と言うは有執を取り去るうとしてだけである。折角有が無くなつた代りに空を残したのでは、空の意味が死んでしまふ。有と無の両方ともなくなるのこそ空の本義であるという。

〔經〕 於<sup>テ</sup>我<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>我<sup>二</sup>而<sup>不<sup>レ</sup>二<sup>、</sup>是<sup>レ</sup>無<sup>我</sup>義<sup>。……(4)無我の義</sup></sup>

〔註〕 什曰、若<sup>シ</sup>去<sup>、</sup>我<sup>ニ</sup>有<sup>、</sup>猶<sup>モ</sup>未<sup>ダ</sup>免<sup>ズ</sup>於<sup>テ</sup>我<sup>也</sup>。何<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>知<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>凡<sup>ソ</sup>言<sup>ク</sup>我<sup>即<sup>チ</sup>主<sup>也</sup>。經云<sup>、</sup>有<sup>三十二根<sup>、</sup>二十二根<sup>即<sup>チ</sup>二十二主<sup>也</sup>。</sup></sup></sup>

註維摩經の羅什説について (稿 本)

雖<sup>モ</sup>云<sup>フ</sup>無<sup>レ</sup>真<sup>宰<sup>、</sup>而<sup>シテ</sup>有<sup>ク</sup>事<sup>用</sup>之<sup>主<sup>。是<sup>レ</sup>猶<sup>モ</sup>廢<sup>主<sup>而<sup>シテ</sup>立<sup>主<sup>也</sup>。故<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>我<sup>、</sup>無<sup>ク</sup>我<sup>二</sup>而<sup>不<sup>レ</sup>二<sup>、</sup>乃<sup>チ</sup>無<sup>我</sup>耳<sup>。</sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup>

第四にもし我を去つて代りに無我をあらしめるようであればこれなお我を捨てきれないものである。およそ我というときには主人公である。仁王經に二十二根が説かれてあるが、それは二十二の主人公が具わつてゐることである。これはなお主を廢すとは言い乍ら別の主を立てるものである。それ故、我と無我とにおいてこれを二つに見ないのこそ本當の無我であるという。

〔經〕 法本<sup>不<sup>レ</sup>然<sup>、</sup>今<sup>則<sup>チ</sup>無<sup>レ</sup>滅<sup>、</sup>是<sup>レ</sup>寂<sup>滅</sup>義<sup>。……(5)寂滅の義</sup></sup></sup>

〔註〕 什曰、明<sup>ク</sup>泥<sup>洄</sup>義<sup>也</sup>。由<sup>テ</sup>生<sup>死<sup>、</sup>然<sup>レ</sup>尽<sup>、</sup>故<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>滅<sup>。生<sup>死<sup>即<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>然<sup>、</sup>無<sup>ク</sup>泥<sup>洄</sup>滅<sup>。泥<sup>洄</sup>滅<sup>、</sup>真<sup>寂<sup>滅<sup>也</sup>。</sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup>

第五にこれは泥洄の義を明かして、生死にしたがつて燃えつくすから滅があるので、生死そのものは燃えない、したがつて泥洄の滅はない。泥洄としての滅が本當の寂滅であるという。

以上迦旃延の有相説法に対し、維摩詰が無相実相の真説法であるべきことを説いた一段の経説に対する羅什説を見たのである。これを内容的に言えば羅什の仏教説は「実相」観として大いにその特色を発揮したものである。これを羅什が他の経句解説の上にも示した事例として次の如きを挙げ得るであらう。

(一) 仏法中、則実相甘露養其慧命。是真甘露食也。(仏道品第八)……經「甘露法之食」の註

(二) 三藏及雜藏菩薩藏、五藏經也。上四藏取中深義、説「実相」等。故得爲「深經」也。(菩薩行品第十三)……經「法供養者、諸仏所説深經」の註

(三) 惣持有無量。実相即惣持之一。若經中説「実相、実相即」是印。以実相印封此經、則爲「深經」也。復次「本言」相、実相也。以「実相」爲「深經標相」也。(同也)……經「陀羅尼印、印之」の註

(一)は經文に単に甘露法等とあるを「実相の甘露」と註した。(二)は五藏の經は菩薩藏以外、あるいは以前のものでもうちに実相の深義を宿すから等しく深經と言ひ得るとした。(三)は陀羅尼(惣持)について実相も「印」たるもので、実相印の当面からすると維摩經も深密の經と言えらる。この經自体にも、「此の不可思議自在神通決定実相の經典」(法供養品第十三)と標記し、羅什はこれを、「放光[經]等に明かす所の実相は広散にして尋ね難し。此の「維摩」經は衆經の要義を叙べ、明簡にしてし易し」と説明している。

羅什の実相真理觀において、「小乗中には四諦を説き、大乘中には一諦を説く。いま諦と言ひは是れ則ち一諦なり、一諦の実相なり」と註し、さらに「一念に一切法を知る、是れ道場。一切智を成ずるが故に」を解したあとに、「大乘の中

には唯だ一念を以て則ち豁然大悟するが、一切智を具うるなり」としている。後年、禪家で特に維摩を重用した所以である。しかし經初(仏国品)の「隨其心淨、則一切功德淨」の文について羅什が、

直心、以誠心信佛法也。信心既立、則能發行衆善。衆善既積、其心転深。(中略)上章、雖広説淨國行、而未明二行之階漸。此章、明下至極深広、不可頓超。宜尋之、有レ途、履之、有レ序。故説「発迹之始、始於直心。終成之美、則一切淨也。

として、誠心、信仏法の直心に導かれた信行の至極するところ、一切淨の宗教的究竟ありとしたのも同じく実相觀による淨土説で、羅什の維摩經註が、曇鸞(A. D. 476—529)以下の淨土家にも影響する所大きい一面のあつたことを忘れてならない。現代においても羅什に宗教信仰の念最も深かつたところが學者によつて実証されている。註維摩はなお多くの問題を残しているが、原經の訳者羅什自身の所説を含めたことは大きな特色であり思想的にも重要なものである。

1 支謙が訳業に従事したのは黄武二年(223)から建興二年(233)までの三十年間とされる。その間に訳出された『仏説維摩詰經』(二巻もしくは三巻。この分ち方については拙著『維摩經の思想的研究』三四頁参照)は、従つて羅什訳維摩より約百五十年前から世に行われていたことになる。他に跋仏調(後漢。二世紀後半)の古維摩詰、竺叔蘭(西晋。同上)の異維摩詰もしくは異毘摩羅詰、竺法護 Dharmaraksas (西晋。三〇八頃七十八

才叔)の維摩詰の諸経および支敏度が二九〇—三〇七年の間に諸家の訳を合糅した合維摩詰経等があつたが、支謙訳以外は凡て伝わらない。ラモート教授は以上のほか刪維摩詰(Dharmaraksā 合糅)、祇多蜜 Gramira 所訳(東晋代)の維摩詰の両経が羅什以前にあつたことを記している。(L'Enseignement de Vimalakīrti par Érienne Lamotte, pp. 2-8)。

2 大正藏三三卷所収『注維摩詰經』十卷は、寛永十八年(1641)刊宗教大学(大正大学)蔵本を原本とし、これを平安時代写大和多武峯談山神社蔵本、貞享三年(1686)刊大谷大学蔵本の両書と対校したもの。何れも日本所蔵本で、而も刊本は共に十七世紀のものである。

3 『出三藏記集』卷八には「維摩詰經序」(釈僧肇)、「合維摩詰經序」(支敏度作)、「毘維羅堤經義疏序」(僧叡法師)を載せている(大正藏五五卷、五八一—五九頁)。

4 羅什、僧肇、道生三師の説のほかに、道融説が一箇所にだけ出る。大正蔵本(前述)では三七一頁下—三七二頁上。なお註釈と言つても三師が經句のすべてに對しそれをなしているわけではない。拙論「註維摩詰經の思想構成」(『維摩經の思想的研究』一〇六一—一〇七頁)参照。

5 「鳩摩羅什伝」(『出三藏記集』卷十四。大正藏五五卷、一〇〇頁上—一〇二頁上)。中には、「時に四方の義学の沙門、万里を遠しとせずして『集る』。名徳秀拔のものに才暢の二公、乃至道恒、僧標、僧叡、僧敬、僧弼、僧肇等あり。三千余僧〔その会下にありて〕稟訪精研し、幽旨を窮むるに務めたり」(國訳一切經、三八二—三頁。林屋友次郎訳)とあり、和訳者はこ

のう才暢二公とは道生、慧遠を指すかと註している。録録には羅什伝として他に、「沙門鳩摩羅什婆」(古今訳經圖紀卷三、大正藏五五卷、三五八頁下—三五九頁下)、「沙門鳩摩羅什」(開元釈教錄卷四、大正藏同卷、五二三頁下—五一六頁上)などを載せるが、ことに後者には、羅什が道融を推賞したことをあげ、「嘗聽秦僧道融講新法華、什乃歎曰、佛法之興、融其人也」(五一五頁上)と記している。法華についてはばかりでなく維摩についても詳しかつたに相違ない。

6 (一)は大正藏五五卷、一四七頁上、(二)は既述『出三藏記集』所収のものを指すべく、同頁下。(三)は同三三〇頁中、(四)は同上頁下、(五)は同三三一頁上、(六)は竜谷大学所蔵(卷一殘欠)本以下二十部。大正藏「昭和法寶總目錄」卷一、一〇五六頁下—一〇五七頁上参照。

7 維摩變については、谷信一稿「變相圖」(平凡社、『世界大百科事典』(20) p. 214)、入矢義高「變文」(同上、p. 258-260)、及び周紹良編『敦煌變文彙録』増訂本(一九六九年十月、香港宏智書店)所収、「維摩經押座文、同菩薩品變文(甲)(乙)、維摩經問疾品變文」(同書 pp. 23-91)参照。

8 大正藏五五卷、一〇二頁下並に欄外註参照。

9 菩薩行品「有以仏衣服臥具而作仏事」の經句註に、「什曰、昔閻浮提王、得仏大衣、時世疾疫。王以衣著標上、以示衆人。婦命病皆得愈、信敬益深、因是解脫。此其類也」としたあと、「肇注、同」(大正藏三三卷、四一〇頁上)とあるのは、明らかに羅什註と僧肇註とがもと別行していたことの証拠となる。

註維摩經の羅什訳について（橋 本）

- 10 大正蔵三三卷、三二七頁中〜下。
  - 11 同、三二七頁下。
  - 12 たとえば羅什におくれること二百余年になるわが聖徳太子（A. D. 574-631）の『維摩經義疏』総序においても、「維摩詰者、乃是已登正覺之大聖也。（中略）一名不思議解脱者、解脱是八地以上權実二智（下略）」とし、その結びには「此經有二名。上言維摩詰、以人名為目。下言不思議解脱、以法為題。重上人名故、於法謂之一」（明治三十年五月、島田著根本、卷一、一頁）と言つて思想内容には進展を示し乍らも、その形式は羅什の跡を追つてゐる。因みに太子維摩疏には前後十八回、註維摩を引くが、何れも「華法師云」としてであり、而も他師説からの引用はない。これなども華註単独行の一証となり得よう。
  - 13 大正蔵三八卷、三三三頁中―三五四頁下。
  - 14 同、三九五頁上。
  - 15 同、四一五頁上。
  - 16 同、四一五頁下。
  - 17 同、四一三頁下一四一四頁上。
  - 18 同、三六五頁上、（菩薩品）。
  - 19 同、三三七頁上。
  - 20 宇井伯寿『大乘仏典の研究』八八七頁参照。
- 補註 註維摩の道生説（昭47・10・22日本宗教学会駒大大会）は関連発表。羅什訳の優れたこと大鹿実秋「維摩經における玄奘訳の特質」（『仏教思想論叢』所収、昭47）参照。
- 〔昭和47年度文部省科学研究費による研究成果の一部〕

執筆者紹介（二）

小野正康	（杏林短期大学教授）
高橋審也	（東京大学大学院）
宮元啓一	（東京大学大学院）
野々目了	（大谷大学大学院）
玉井威	（大谷大学大学院）
割田剛雄	（東洋大学東洋学研究所研究員）
田中典彦	（仏教大学院）
平野修	（大谷大学特別研究員）
神谷正義	（仏教大学院）
谷川泰教	（高野山大学大学院）
神谷麻俊	（駒沢大学大学院）
和田昌太郎	（大谷大学研究科修了）
河野重雄	（駒沢大学大学院）
酒主照之	（高野山大学大学院）
金子英一	（高野山大学大学院）
白田淳三	（大正大学大学院）
川口高風	（竜谷大学卒）
孫英翼	（駒沢大学大学院）
石川力山	（東京大学大学院）
	（駒沢大学大学院）

（四四頁につづく）